

## 神に不可能なことはない

ルカの福音書 1 章 26-38 節

### はじめに

先週から「アドベント（待降節）」に入りましたので、イエス様の誕生の出来事から説教をしています。先週は、母マリアの夫であるヨセフの立場から、イエス様の誕生の出来事を学びました。今日は母マリアの立場からイエス様の誕生の出来事を学んでいきたいと思えます。

イエス様は処女マリアから生まれました。ある時、御使いガブリエルがマリアのもとに現れて、「**あなたは身ごもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい**」と言われます。そしてその子は、人々が待ち望んでいた救い主メシアである、またその子は聖霊によってあなたに宿る、聖なる神の子であると言われるのです。

マリアは、あまりにも突然の出来事であったので戸惑いますが、そのことを受け入れて、イエス様の母となっていくのです。

### 1. マリアについて

マリアは、26 節にあるように、「**ガリラヤのナザレという町の一人の処女**」でした。「ナザレ」という町は、新約聖書に初めて出てくる町で、旧約聖書には一度も出てきません。人々からは、「**ナザレからは何も良いものが出ない**」(ヨハネ 1:46)と思われていた小さな田舎町でした。

「マリア」という名前は、旧約聖書に出てくるモーセの姉の「ミリヤム」からとられた名前です。ミリヤムは女預言者で、モーセと共にイスラエルの民を導いた女性です。ですから人々は、女の子が生まれると、好んで「マリア」という名前を付けたようです。新約聖書には、「マリア」という名前の女性がたくさん（5人）出てきます。ですからマリアという名前は、特別な名前ではなく、とても平凡な名前でした。

ですからマリアは、決して特別な人ではありませんでした。小さな田舎町に住む平凡な女性だったのです。

27 節には、彼女は「**ダビデの家系のヨセフという人のいいなづけ**」であったとあります。彼女は、夫であるヨセフと婚約していました。当時、婚約した二人は正式な夫婦となります。しかし実際に一つ屋根の下で一緒に生活するのは、約一年間の婚約期間を経た後であったようです。当時は、男性が成人するのは 13 歳であり、女性は 12 歳であったと言われます。ヨセフとマリアが何歳で婚約して夫婦となったのかは分かりませんが、おそらく十代であったと思います。

マリアはヨセフと結婚し、素朴で幸せな家庭を築き、小さな田舎町で静かに暮らす未来を

思い描いていたと思います。彼女には、彼女なりの未来予想図があったでしょう。

しかし彼女の人生は、御使いガブリエルの登場によって、突然、予想もしていなかった方向へと変えられてしまうのです。人々が待ち望んでいた救い主メシア、聖なる神の子を聖霊によって身ごもり、母となるという人生です。この人生は決して、彼女が望んでいた人生でも、彼女が祈り求めていた人生でもありません。全く思いもよらない人生でした。

私たちもそれぞれ、人生の計画や未来予想図があるでしょう。ある人は、夢や目標を持ち、その実現に向かって毎日努力していきます。またある人は、具体的な夢はなくても、生活に困らない程度に家族みんなが健康で、それなりに幸せに暮らせればそれでよいと考えます。

しかし私たちには、思いもよらない出来事によって、人生の計画が全く変わってしまうこともあります。病気になったり、事故に巻き込まれたり、災害に遭ったり、事業に失敗したり、家族に問題が起きたり、愛する人を失ったり・・・。

自分の夢や目標を確実に実現していく人もいますが、多くの人の人生は、決して思い通りになるものではありません。箴言 19：21 には、こうあります。「**人の心には多くの思いがある。しかし、主の計画こそが実現する**」。私たちには様々な人生の計画があります。計画を立てることや夢を持つことは、決して悪いことではありません。しかし、私たちの人生の背後には、神様の御計画があることを忘れてはなりません。神様は、御自身の御計画に従って、世界全体と私たちの人生を導いておられます。私たちは、神様の御計画に逆らうことはできません。私たち一人ひとりの人生に対する神様の御計画は、私たちには隠されています。ですから私たちにはしばしば、「神様なぜですか？」と言いたくなるようなことが起こります。神様への信仰が揺らいでしまうようなことも起こります。そのことのゆえに、神様の愛を疑い、神様の存在を疑い、信仰から離れていく人さえいます。

## **2. マリアの献身**

マリアは、人生の計画の変更を余儀なくされました。しかし彼女は、戸惑いながらも、「**私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように**」と言って、人々が待ち望んでいた救い主メシア、聖なる神の子を聖霊によって身ごもり、母となるという人生を受け入れ、神様に自分の未来を委ねていったのです。それは、自分の人生の計画を手放すことでもありました。自分の思い描いていた未来を諦めることでもありました。なぜ彼女は、突然の人生の計画の変更を受け入れることができたのでしょうか。

彼女は自分を「主のはしためです」と言いました。彼女は、自分は神様に仕える奴隷や召使いだと考えたのです。彼女には、御利益信仰はありませんでした。彼女の信仰は、神様が自分を幸せにしてくれるなら信じるし、幸せにしてくれないなら信じないというものではありませんでした。彼女の信仰の基本的な姿勢は、神様は絶対的な存在で、自分は神様に従うべき存在であるというものでした。神様の御計画は揺るぎないもので、自分はそれに従うほかないというものでした。御利益信仰の場合、つまり自分の幸せのために神様を信じているような場合、突然の人生の計画の変更は決して受け入れることはできません。

もう一つ、彼女が突然の人生の計画の変更を受け入れることができたのは、御使いの言葉があったからです。御使いは彼女に、これらの言葉をかけました。「**おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます」「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです」「神にとって不可能なことは何もありません」**。

マリアにとって、人々が待ち望んでいた救い主メシア、聖なる神の子を聖霊によって身ごもり、母となるという人生は、多くの不安がありました。夫であるヨセフは、このことを理解してくれるだろうかという不安もあったでしょう。実際ヨセフは、マリアが自分の知らないうちに身ごもったことを知った時、婚約を解消し、離縁（離婚）しようと考えたのです。マリアとヨセフは離縁（離婚）する寸前までいったのです。

また旧約聖書の律法では、婚約中に他の男性と性的な関係を持った場合、石打ちにされて殺されなければなりません。聖霊によってみごもったということが理解されず、石打にされる命の危険もあったのです。

しかしそれでもマリアは、神様の御計画を受け入れ、それに従い、自分の人生を神様に委ねていったのです。それは彼女が、神様に不可能なことは何もないと信じたからです。どんなことでもできる神様が、自分の人生を必ず導いてくださると信じたのです。またその神様がいつも自分とともにいてくださると信じたのです。また「おめでとう恵まれた方」また「あなたは神から恵みを受けたのです」と言われたように、この人生の計画の変更には必ず神様の恵みがある、神様の御計画には恵みが満ちていると信じたのです。つまりマリアは、「信仰」によって、自分の人生に対する神様の御計画を受け入れていったのです。

実際マリアは、ヨセフと離縁（離婚）することも、石打ちにされることもありませんでした。神様がヨセフのもとにも御使いを遣わして、ヨセフにも信仰を与えてくださったのです。

しかし神様の御計画に従ったマリアの人生は、決して何の苦労もない人生ではありませんでした。イエス様の母となったマリアは、イエス様の十字架の死を見届けなければなりません。お腹を痛めて産んだ息子を、目の前で殺される姿を見なければなりません。イエス様が十字架で死なれた時、マリアはすでに未亡人でしたから、おそらく夫のヨセフは、先に天に召されていったのです。マリアの人生は、夫に先立たれ、息子を目の前で殺される人生でした。

しかし御使いは彼女を、「恵まれた方」「あなたは神から恵みを受けた」と言いました。客観的に見れば、マリアの人生は不幸であったかもしれません。しかしそれでも、マリアの人生には神様の恵みが確かにあると言うのです。おそらくマリア自身も、自分の人生を不幸だとは思わず、信仰を捨てることもなく、自分の人生を恵みとして受け取っていたのでしょう。その証拠に彼女は、イエス様が復活し天に昇られた後の初代教会の祈り会の中で、心を一つにして祈っていたのです。

## **おわりに**

マリアは「信仰」によって、突然の人生の計画の変更を受け入れ、神様の御計画に自分の

人生を委ねていきました。私たちの人生は、必ずしも自分の思い通りになるものではありません。思いもよらない出来事で、人生の計画の変更を余儀なくされることもあります。

使徒パウロは、「人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです」(ガラテヤ 6:5)と言いました。すべての人は、人生において負うべき重荷というものを、神様から与えられるのです。マリアにとっては、イエス様を聖霊によって身ごもり、イエス様の母となるという重荷でした。イエス様にとっては、私たちの罪を償うために神様に完全に従い、十字架の死にまでも従うというものでした。

イエス様はこう言われました。「**だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい**」(マルコ 8:34)。イエス様を信じる私たちクリスチャンは、自分の十字架を背負って、イエス様に従うことが求められています。自分の人生の計画を捨てて、神様から負わされた十字架を背負って生きることが求められているのです。

イエス様を信じる私たちクリスチャンは、神様から負うべき十字架を与えられています。十字架は、苦しみや痛みを伴うものです。決して自分から望むものではありません。イエス様ですら、十字架が取り去られるように三度も祈ったほどでした。十字架は多くの場合、自分の人生の計画とは違うものです。病気になったり、事故に巻き込まれたり、災害に遭ったり、事業に失敗したり、家族に問題が起きたり、愛する人を失ったりすることであるかもしれません。また責任ある立場に立たされることであるかもしれません。できれば避けて通りたいものかもしれません。しかしイエス様は、それらの十字架を背負いながら、イエス様に従ってくることを求めておられるのです。

皆さんが負うべき十字架は何でしょうか？皆さんが神様から与えられた十字架は何でしょうか。また皆さんが負うことを拒んできた十字架は何でしょうか。マリアは、与えられた十字架に対して、「私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」と「信仰」によって受け入れて、それを背負う決心をしました。イエス様も、「**わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように**」(マルコ 14:36)と言われて、十字架を受け入れていかれました。私たちは、自分に与えられた十字架を受け入れて、背負いながら生きてこそ、イエス様の弟子となることができるのです。十字架を避けて、イエス様の弟子になることはできません。十字架こそが、イエス様の弟子である証拠です。

しかしイエス様は、十字架を背負う私たちにこう言われます。「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです**」(マタイ 10:28-30)。イエス様は、私たちとくびきを負ってくださり、私たちの十字架を共に背負ってくださいます。私たちの十字架の重荷を軽くしてくださいます。その結果、私たちのたましいは、十字架を負いながらも安らかでいられるのです。

私たちは、背負わされた十字架から逃げずに、「信仰」によって受け入れ、神様に委ねていきましょう。聖なる神の子であるイエス様が十字架を共に背負ってくださるのですから。

天におられる恵み深い父なる神様。

私たちの人生には、負うべき重荷があります。またイエス様を信じる私たちには、負うべき十字架が与えられています。それは、必ずしも私たちが望むものではないかもしれませんが。しかし、マリアのように、あなたから与えられたものとして「信仰」によって受け入れ、背負う決心をすることができますように。どうか私たちの十字架をイエス様が共に背負ってくださり、私たちの魂に安らぎを与えてください。私たちが十字架の重荷に押しつぶされないように、イエス様が最後まで私たちを支えてください。そしてあなたと共に天に迎えられ、終わりの日に復活を経験することができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。